大野正夫：フィリピン・セブ島で開かれた第16回国際海藻シンポジウム（1998年4月12-17日）

Masao Ohno: XVI International Seaweed Symposium in Cebu, Philippines

3年に1回開催される国際海藻シンポジュウムの第16回大会が1998年4月12日より6日間にわたって，フィリピンのリゾートの島，セブ島で開催された．セブは，熱帯性海藻のキリンサイの養殖の発祥の地であり，現在でも沖合い2時間（高速船で）のボホール島に近いサンゴ礁帯の浅いところで大規模な養殖が行なわれている．これらの海藻からカラギナンを抽出する工場もセブに集まっており，海藻養殖と海藻工業の現場がみれるということで，開催地に選ばれた．熱帯域，東南アジアで初めての国際海藻シンポジュウム開催であり，多くの参加者が期待されたが，アジアの経済事情の悪化などにより，アジアの国々で海外渡航が自粛され，420名ほどの参加者に留まった．筆者は，国際組織委員会のメンバーとして準備段階から，今回のシンポジュウムに関わってきたので，このシンポジュウムの準備や運営を含めて報告したい．

シンポジュウムの準備

国際海藻シンポジュウムは，約50年の歴史がありヨーロッパ，アジア地区などのブロックから選出された委員15名から構成される国際海藻協会(International Seaweed Association-ISA)が開催国を決め，国際組織委員として，シンポジュウムのアドバイスをする．また，ISAは発表論文のなかから審査をして良い論文を"Developments in Hydrobiology" のシリーズとして，Hydrobiologiaという雑誌にまとめている．開催国は，国内委員会を組織し，シンポジュウムのプログラム作成，準備・開催にあたる．ISAの会長が，昨年3月に辞任し，急遽，Dimitri Stanocioff副会長が昇格し，4月末にセブで，ISAと国内委員会の初会合が開かれ，会長と筆者がISAのメンバーとして出席した．

第16回シンポジュウムのChiarmanは，フィリピン大学のGavino Trono教授，Vice Chiamanには，セブにある私立サンカルロス大学のFilipina Soto 教授，Secretaryはフィリピン大学のRodora V. Azanza教授になった．そこで示されたプログラムは，前回のシンポジュウムのスタイルを踏襲してミニシンポジュウムの数が少なく，コンビナーや招待講演者も決まっていず準備不足が目立った．トピック的テーマや海藻工業に関するテーマを増やすこと，アジアからの招待講演を増やすこと，セカンドアナウンスメントを，8月中に印刷完了することなどが強く要望された．結局，セカンドアナウンスメントが10月に関係者に届く状態で，今回のシンポジュウムは，準備の遅れがめだち，参加者には手続きや送金などに戸惑いが多かった．これが参加者の減少の一因になったと思う．しかし，インターネットのISS・ホームページが開設されて，それをチェックすることにより準備の進行がわかり，後半は日程の確認，自分の発表の確認などができた．今後の国際シンポジュウムの運営方法として参考になる施策であった．

アジア経済の悪化から，フィリピンのカラギナン工業も経営状態が好ましくなく財政的援助が充分でなかったのが準備の遅れともなった．ISA日本支部は，Trono教授の要請で，急遽，印刷費を送金することもあった．

ISA日本支部

今回のシンポジュウムは，ISA日本支部が団体ツアーを企画し参加者を募った．高齢な西沢先生，鈴木宗一郎氏から大学3年生まで42名の参加者があり，ISSへの日本人参加者はほとんどこのツアーを利用した．今までは，ISA委員の有賀先生のお世話で旅行会社がツアーを企画していたが，今回のようにはいかなかった．このツアーでは，同じ宿で朝食付，シャトル・バスで会場に一緒に行ったので，お互いに話合う機会が多く，日本での学会参加とは違った幅広い交流が行なわれた．

ここで，ISA日本支部を紹介したい．日本の海藻業界は1983年，第11回中国・青島大会より毎回のシンポジュウムにUS$ 10,000から100万円の寄付をしてきた．その基金を募るために，当時のISA委員であった西沢先生，有賀先生と海藻業界の大房氏，角谷氏らの御努力で，一度に集めるのは難しいので，年会費とし

左上：開会式，左上：発表会場，左下：寒天の展示説明，右下：ツアーのさよなら夕食会

て基金を集める日本支部が組織された．チリ大会より，日本支部を基金を出資する団体から国内でも情報交換の活動しようと組織を改変し，現在，ISA日本支部会長に有賀先生，事務局を筆者，幹事に海藻業界から，岩元，鈴木（実）氏らがなり，セミナーやシンポジュウムを開催し，情報の交換が行なわれるようになった．学術経験者は，特別会員として7名が加わって，いろいろと日本支部に助言をしている．現在，会社会員は25社であるが，もう少し大きな組織になることを期待したい．

講演・ポスターセクション

シンポジュウムの会場は，セブ最大のホテル，セブプラザで行なわれた．講演は500名が座れる大ホールと3つの小ホールで行なわれたが，広さもエアーコンデションも良好で快適であった．ロビーも広く，昼食（無料）も全員会場で取るので，講演以外に私的交流もしやすく，多分不満を持ってやってきた多くの参加者も，会期中に，このシンポジュウムに満足するようになったのではないかと思う．

ミニシンポジュウムのテーマは，分子生物学から先進的海藻養殖，海藻工業，バイオリアクターなど幅広い内容であったが，Applied phycology の分野が多かった．日本から，能登谷先生，天野先生が，招待講演者として報告された．Contributed paper は，予想外に生態学の報告が多かった．海藻の生育環境保護，海藻資源の維持が，各国で注視されていることかもしれない．Molecular biology の分野の報告が意外に少なかった．長く国際海藻シンポジュウム（ISS)に出席してきたが，国際藻類学会大会 (IPC)が同じ参加者規模になるにつれて，ISSは，海藻の生態，海藻化学，応用海藻学の報告に特色が表われてきて，系統分類学・形態学分野の報告が少なくなりつつあるような印象を持った．海藻研究者のなかで，ISS あるいは IPC へ参加と分化が起こりつつあるように思う．次回は，ISS と IPC とが，2001 年の同じ年に開催されるので，この傾向がさらに出てくるのではないかと思う．ISA 委員会でもこのことが議題になったが，ISS は，海藻工業界の財政的支援もあり，IPC とは，別に行なうことを続けることが了承された．

ポスターセクションは，大学院生の発表が多く，最近のパソコン技術を最大限に使い，精魂こめて美しくまとめられていた．あまり熟読することができなかったが，海藻学の研究は，先進国，後進国の差がなくなりつつあることを感じた．

パーテイーとエクスカーション

2回のガーデン パーテーと1回のレセプションがあった．主催者が，はりきって舞踊などの催しの時間が長く，席を立ちにくくなり，飲んで語る時間がなくなり，少し物足りままに終わった．アルコールがはいると，国際的交流もしやすくなるので，余計なものはない方が，かえって良かった．エクスカーションは，海へゆく組とカラギナン製造工場・市内見物などに分かれた．キリンサイ養殖場ツアーの参加者が多く，熱帯の珊瑚礁の海を満喫した．西沢先生，石川先生の話では，バンカーという小さな船にゆられ，厳しい船旅であったという．今回，日本人グループは，これ以外に小グループでセブの魚市場や各種工場を見学に行くこともあった．宿が同じであることで，このようなことも行ないやすかった．

展示会

このシンポジュウムには，ISA日本支部は，各会社から海苔，ワカメ，ヒジキ，昆布，寒天製品などの海藻食品，海藻抽出物を用いた化粧品，シャンプー，海藻パルプ膜，アルギン酸繊維による包帯，ガーゼなどを提供してもらい，約150ｋｇの出品物を持参し展示した．常設の展示室を与えられたが，食料品などは，極めて安い売値をつけたバザーにした．収益金は，運送費用や説明にあたった者の謝礼などに使い，一部は展示室使用料として事務局に支払い，予算不足の折，感謝された．このような展示は，国際海藻シンポジュウムでは初めてであるが，非常に好評であった．このシンポジュウムには，各国の海藻業界からの参加者も多くおり，大変参考になったと思う．また，展示を出した会社からの参加者は，「自社の製品に外国人がどのような反応を示すかが伺えて勉強になった」と喜ばれた．次回のシンポジュウムも各国，各社からの出品を期待したい．

参加証明書と各種の受賞

今回のシンポジュウムから参加証明書を発行することになった．卒業証書のようなきれいな参加証書であった．アジアの多くの大学，研究所では，このような国際会議に出席すると昇任などに必要な得点になるので，証明書がほしいという要望があり発行されることになった．150名以上の参加者が，この証明書の受理を申請した．

このシンポジュウムには，海藻業界などからのスポンサーによる賞があり，開会式，閉会式の一つのセレモニーとなっている．数人の受賞者が壇上に上がったが，大部隊で参加した日本人グループから受賞者が出なかった．選考の方法も少しおかしいところがあるが，それでも受賞者が出かったのは寂しかった．アフリカ人，欧米人，アジア人，主催国にと，均等にばらまき，あまり内容を検討してはいないと思えたが，「日本人が選ばれなかったのは，なぜか？」と考えてしまった．次回から，ISA日本支部からのシンポジュウムを支援する基金を削減してでも，いくつかの賞を日本から出し，アジアや日本からレベルの高い研究がシンポジュウムで発表される”よび水”をすることを提案したい．

ISAホームページと今後のISS開催

今まで，”Applied Phycology- Forum" というニュースレーターが，ISAより発行されており，シンポジュウム参加者には次のシンポジュウムまで，年に3回送られていたが，チリ大会での出費が多く，ISAの財源がなくなり中止していた．今後，この方法を廃止し，インターネットで，ISAホームページ "Applied phycology -Forum" を開設することになった．Dr. Mark A. Ragan (NRC Institute, for Marine Bioscience , Halifax, Canada) が責任者となった．日本より海藻関係の出版，海藻の生産量など多くの情報をe-mailで彼に送ることをお願いしたい．Dr. Raganのe-mailは（mark.ragan@nrc.ca）である．

次回の国際海藻シンポジュウムは2001年，南アフリカのケープタウンで，1月に開催が予定されている．主催会場はケープタウン大学である．2004年は，ノルウエイの北海に面したベルゲンで開催されることが決まった．大学院生，若手研究者の参加を大いに期待している．

（781-1164　土佐市宇佐町井尻194　高知大学海洋生物教育研究センター）